

# 博物館 Dictionary No.194

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

特集陳列 絵付けの美 ながさき かめ やま やき 長崎・亀山焼について勉強しよう。

えが  
やきものに文様を描く  
そめつ  
ながさきかめやまやき  
染付けの美・長崎亀山焼



図1 染付けからくきもんつば 佐賀県立九州陶磁文化館蔵

やきものは、ご飯をたべる飯茶碗、料理やお菓子がのせられる皿や鉢、お茶やコーヒーを入れる湯呑やカップなど、日々の生活に根付いた工芸品です。その内側や外側には、花や鳥、山河や人物の情景、格子や丸、四角、吉祥文など、様々な文様が描かれています。

そうした絵柄のなかでも、青色だけを使って文様を描いた染付けは、日本人が特に好んで使ってきたものといえるでしょう。素焼きしたやきものの生地の上に、呉須とよばれる、コバルトという金属を混ぜ合わせた上絵具（顔料）で文様を描き、その上に透明な釉薬を掛けて焼いて作られます。

染付けは、中国で、唐時代の終わり頃（9世紀末から10世紀初頭）に作られ始めました。元時代になると、景德鎮窯でたくさんの染付けが作られるようになります。中国や朝鮮では、青い文様であることから、「青花」と呼ばれています。日本では、江戸時代の初め（17世紀初頭）、有田や伊万里において、磁器生産が始まったことによって、染付けが作られるようになりました。それ以降、有田を中心に肥前国（現在の佐賀県、長崎県（壱岐・対馬を除く））の各地で、染付けを焼く窯が広がりを見せていきます。

今回は、そのなかでも、特に染付けによる絵付けの美しさが注目される、亀山焼を紹介したいと思います。

亀山焼（図1）は、文化4年（1807）、長崎港を一望でき、現在は坂本龍馬像が建立されていることでも有名な風頭山中腹（長崎県長崎市伊良林）に開窯されました。磁器を中心に生産した窯で、発色の美しい呉須を使い、当時、中国で流行している文様や画題を取り入れながら、染付けを生産したことで名高いやきものです。

当初、長崎港へ来航するオランダ船向けに水甕を焼いていました。その後、長崎奉行から援助を受けながら、文化11年(1814)に平戸藩領の三河内窯(長崎県佐世保市)から陶工を招き、熊本・天草の良質な陶土と中国から輸入した呉須を用いて、良質な染付を製作するようになります。絵付けが美しいこと、板状の粘土を張り合わせて作る段重(重箱)のように、高度な技術を必要とする製品が精巧に作られていることなどから、優れた工人が亀山焼の工房にいたことがうかがえます。



図2 染付牡丹文鉢 鉄翁祖門画 長崎歴史文化博物館蔵

さて、亀山焼の窯が位置した長崎は、江戸時代、唯一の開港地でした。そのため、中国やヨーロッパなどの海外より持ち込まれる文化や書物、文物をもとめて、多くの画家や文人、学者たちが、日本全国よりやってきました。そうした背景から、亀山焼の絵付けには、崎陽三筆と称される木下逸雲、鉄翁祖門(図2)、三浦梧門をはじめとした長崎の画家はもちろんのこと、文人画家の田能村竹田や筑前秋月藩の御用絵師の齊藤秋圃、漢学者の頼山陽なども携わっていました。こうした数多くの知識人が絵付けをする事例は、他の窯ではあまりみられません。また、中国の清朝陶磁の影響を色濃く受けた、山水文、魚文、雲龍文、蝙蝠文、氷裂文などの文様が多く描かれたこと、粉彩と呼ばれる上絵技法が用いられたりしたものがあることや、長崎にちなんだラクダや長崎港の様子を描いたものが多いことも特徴となっています。

亀山焼は、このほかにも中国・江蘇省の土を輸入して生産したり、表面に漆塗りを施すなど、模索し続けます。そして、碗や皿といった日用品から、硯や水滴などをはじめとした文房具に至るまで、多種多様な製品がつくられました。



図3 飯碗・湯呑 坂本龍馬使用 下関市歴史博物館蔵

その後、亀山焼の窯は、慶応元年(1865)頃には閉窯してしまいます。亀山焼が幕末の混乱期、世界情勢に影響されながら操業していたことは間違いありません。また、坂本龍馬らが結成した亀山社中は、閉窯後の作業場などを利用したためにその名がつけられました。龍馬が愛用していたと伝わる飯碗と湯呑(図3)は亀山焼で、もしかすると作業場に残されていたものかもしれません。亀山焼は絵付けの美しさから、広く愛用されてきましたが、龍馬もその魅力にひかれた一人だったのでしょう。

(工芸室 降矢哲男)